

主の昇天

第一朗読 使徒言行録 1・1-11

第二朗読 ヘブライ 9・24-28、10・19-23

福音朗読 ルカ 24・46-53

2025.6.1 9:30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

今日わたしたちは、主の昇天——イエス様が天に昇られたということ——を記念する祭日のごミサをお捧げしています。

しかし、イエス様が天に昇られたということを、空間的な意味で考えると、今日の祭日の意味を見失ってしまう可能性があります。上空何メートルのところに天国があるとか、そういうことをわたしたちは信じているわけではないからです。むしろ、新約聖書といえども古代の文章ですから、その古代の表現で聖書を書いた人たちが何を言おうとしているのかなということ、一所懸命、現代人——今のわたしたち——の感覚で考えてみるということが大切だと言えると思います。

そういう意味で、イエス様が天に昇られて天におられるというのは、一つには天が高く、地とはるかに隔たっているように、遠い所にいらっしゃるということでもあると同時に、しかし、地上のどこからでも空を見上げることができるように、イエス様は近くにいらっしゃる。遠いけど近い。その、弟子たちが体験したイエス様との関係を表していると言うことができます。

弟子たちが、ある意味で、最初から天におられるイエス様と出会ったのではない、地上を通して。でも死と復活を経て、復活したイエス様に出会うことを通して、イエス様が天にあげられたという体験をしたわけです。どういうことなのかと考えると、最初にイエス様に従っていた弟子たちは、もちろん神の国を宣べ伝える——本当に神様がわたしたちに望んでいることは何で、わたしたちがどうすれば良いのかということを一所懸命イエス様がみんなに伝えようとした。それを手助けするとか、協力者としてイエス様によって呼ばれた協力者であるという自覚はあったと思いますけれども、一方でそんな協力者としてイエス様に従っている自分たちにイエス様は何をしてくれるのかなってということが一番の心の中心にあったように思います。

「すべてを捨てて、わたしはあなたに従ってまいりました。何をもらえますか」ってペトロが聞いてたりとか、あるいは、弟子のヤコブやヨハネが、栄光にお入りになるときに自分たちを一番近くの高い位にしてくださいって願ったり、そういうようなことが聖書には出てきます。だから協力者なんだけど、でもイエス様が自分に何をしてくれるのかなっていうことをずっと考えていた。ところ

が、復活した主に出会った。その後の弟子たちは、簡単に言えば、自分たちもイエス様のようにになりたいという思いが心の中心になったと言えると思います。

今日の第一朗読は使徒言行録という書物から取られましたけれども、その弟子たちが、イエスが生前になさっていた業を行うようになっていったという、そのことがずっと、色々書かれているわけです。その表現は、弟子たちが「イエス様から何をもらえるのかな」っていうことばかりを考えるのではなくて、自分たちがイエス様のようにになりたい、その思いで生きるようになったという、その生き方の転換を表していると言えるんです。

でも、自分たちがイエス様のようにになりたいと思ってみると、イエス様の自分の命をすべての人の前に置く人、すべての人のために自分の生涯を使うっていうその生き方が、自分たちといかに隔たっているかということを通して言っているように、はるか先に、はるか遠くにいらっしゃる。自分たちと比べて、イエス様は全然違うということが通感される。しかし一方で、イエス様のようにになりたいと思った者にとって、それはイエスがはるか先を歩んでおられるとしても、自分たちもその同じ道の上にいるのだ、そして今この自分のレベルというか自分のその人生の中で、イエスだったらどうするのか、あるいはイエスのようにするにはどうしたらいいのかということを通して、イエス様自身が自分に何をしてくれるのかって考える外側にいる方ではなくて、今絶えずイエスとともに、イエスだったらということを通して自分の中にいらっしゃる方へ変わった。あるいは、同じ道を歩んでいく者同士としての関係になった。同じ道を歩むというのは、最近のカトリック教会では流行っている言葉なんです。

「シノドス」あるいは「シノダリティ」っていう——狭い意味では「全世界代表司教会議」っていう日本語で訳されているバチカンの会議のことを「シノドス」って言いますが——その元々の意味はギリシャ語から来ていて、**syn**（シュン）ともに、**hodos**（ホドス）道——「ともに道を行く者」というようなことから来ているんですよ、っていうのをフランシスコ教皇様が何度も強調されていたわけです。という意味では、本当にイエスと全然違うけど、でも同じことを求めて同じ道を歩んでいる者同士ということでは近い。あり方は、生き方は本当に遠く隔たっているけど、しかしイエス様のことを考えて、心の中に、内面で、何を目指していらっしゃるのかということを経験し、そして自分の生き方の中で考えるということでは近い。それが「天に昇られた」っていう表現で表されているように思います。

わたしたちは、イエス様が近いということを通して、そして特にご聖体を拝領することを通していつも思い起こします。イエス様は自分の中におられるのだということです。でもそれは、じゃあ聖体を拝領してあげたから、イエス様わたしに何をしてくれるんですかっていう思いだけでずっと考えていたら、中

にいらっしゃる方の存在をわたしたちは本当は感じられなくなってしまうということがあるのではないかと思います。

むしろ、中にいらっしゃるイエスとともに、今周りの人との繋がりの中で、わたしは何をするのか、あるいはイエス様だったら何をするのか、いつも考え続けることを通して、近くにおられるイエス様を感じるし、またイエスのようになりたい、変わっていきたい、そのためだったら恵みは限りないのだということを教会は表現しているし、表現だけではなくてカトリック教会はまさにその恵みは確かに聖体を通して与えられると信じて、伝えてきていると言うことができます。

わたしたちがそれぞれ、弟子たちの歩みのように、イエス様と自分を比べるならばはるかに隔たっている、しかし同じイエスの背中を見て同じ道を歩んでいきたい、そこに呼ばれているんだということをこのミサを通していつも思い起こしている。わたしたちがまさに聖体拝領のときに「わたしはあなたをお迎えするにふさわしい者ではありません。全然違います。あなたのようにではありません。しかしお言葉をいただくだけで救われます」、そのわたしたちの中にイエスとの対話があることを通して、そこに希望があるのだといつも信仰告白する。そのことが一人ひとりの人生の歩みの中でも実現していく、そういう意味で近くにイエス様がいらっしゃることに目が開かれて、その恵みを受け取ることができる、その希望を絶えず新たにしていきたいと思います。

今日、主の昇天の祭日を祝うわたしたちが、本当に遠くに隔たっている遠い目標ではある、でもその方はいつも自分たちと、わたしたちとともにいて、いつも対話しながらわたしたちをご自分のもとに、ご自分のようになるように導いてくださるのだと希望を新たに、ともにこのごミサをお捧げして恵みを願いたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>